

# 一学期の抱負と展開

## —実践のなかにみられる 幼児の発達の姿をおって—

柴 田 い つ

### (一) はじめに

新しい幼児たちを  
迎え、まず教師とし  
ては、昨年よりまし  
て、よりよい経験や  
活動を——と抱負や  
願いをもちます。と  
同時に、就学一年前  
の教育として、それ  
らは、どのような内  
容であればよいの  
か、つまり教育の本  
筋にふれていきなが  
ら、どんな幼児に育  
つてほしいのか、な  
にをどのように伸ば  
してやればよいのか  
などの基本的な問題  
を、はつきりつかん  
でいかなければなら

ないと思いません。

昨年度をふり返ってみますとき、卒直にいつて、ひとりひとりの幼児が、自発的にのびのびと行動することの成長は一応つかめたように思うのですが、その幼児の活動の意味が、五歳児としての発達に見合った教育的な価値のある経験であったかどうかといった点では、疑問が残ったのです。また、「ひとりひとりを尊重する」ことのねらいが、ほんとうの意味の幼児を理解し、尊重してきたといえるかどうかということ、つまり、幼児が満足していれば、一応のねらいは達成されたものと安易に考えていた面や、幼児の発想を大切に、さらに遊びの発展にかかわって、幼児らの考えや行動をよく理解するなかで実践してきた教師としての役割や指導内容についても、もうすこし話し合っていく必要を感じました。要は、ひとりひとりの幼児たちの要求を十分に表出させ、そのなかでの教育的な価値ある経験を、発達の課題を達成することのなかで育ててきたかということです。

このような反省から、本年度としては、あくまで幼児の感情を受容し豊かにしてやるなかで、教師は、幼児の成長をもっとはつきりつかんでいきたいと考えました。つまり、本年度の当園の目標は、「遊びのなかにみられる幼児の発達と教師の指導」としたのですが、それぞれの時期における経験に、幼児たちのとりくみが、どのように変化し成長していくのか、日々の保育の積みあげ

のなかから育ていくものを、教師はどうとらえ指導していけばよいのかをみていきたいと考えました。

また一方、母親の希望も、「のびのびとなんでもよろこんで行動できる子に」とか、「はっきりものがいえ、集団生活を楽しくやれる子に」などの態度形成面の要求も、かなり多くなってきましたので、私たちは、この一年間の発達からおさえて、大まかな見通しのなかに、学期、学期にみられる幼児の成長を、その段階で反省していつてみたいと思います。

## (1) 一学期の実践から

そこです、この一学期としては、入園後の日々変化していく幼児の姿のなから、幼児をとりまく、まわりの条件にかかわって、幼児たちが、いかに自己を表出させていこうとしているのか、という面を中心にして、実践のなから、幼児の興味、意欲や自信、思考や協力のめばえなどが、どのようにして育ってきたかということ、パーソナリティ形成の中核である豊かな情緒の発達——逆にいえば、入園までの家庭生活において、十分に経験されねばならなかったことに対する治療ということになる——ということと関連させて、拾いあげてみたいと思います。

## (1) 「M子の関心」

——興味のことぐち——

ちがった環境に入っても、幼児たちのほとんどは、物を媒介として遊べるようです。入園後の幼児たちは、遊びやすいふんいきとまわりの条件によって、いっそうその動きは活発になってきます。でも「あつ、おもしろそうだな、ぼくもやってみよう」という気持と動作とは、必ずしも一致しない場合、つまり、遊び方がわからなかったり、なんとなく物おじして手をださない幼児や、「どんなことでも先生にいうんですよ」とたえず母親にいわれていような場合は、気軽に遊べません。こういった消極的な幼児も「かごめかごめ」などをして友だちと手をつないだり、ちょうちょうやはちになって遊んだりすることによって、だんだんと気持がほぐれていくものです。でもそういう時期をすぎても、たえず教師のさそいかげがなければ動けない幼児もいます。そのような幼児には、なんとかして、興味をひきだしてやりたいと一日の生活のなかでチャンスをまったり、意識的に働きかけたりしていきます。

M子は無口で入園後一週間目にやっと教師の問いかけに、「うん」とか「ちがうの」とか自分の意志で返事をしてくれるようになります。友だちの遊ばせは伴いません。友だちの遊ぶようすを、じつと傍観しているので、M子の手をつなぎ、「ごちそうたべにいきましょうね」とままごとコーナーへいったり、砂場での

山づくりや、遊動木にいっしょに乗ったりして、気持を少しずつ開放してやっていました。

入園後の十日目のことです。三、四人の幼児たちが、黒板に信号機を描いているのを、M子は、いままでにはない興味のある表情でそれをみていたので、私はM子の気持がとらえられるのではないかと思いましたが、それでも直接M子にぶつかるとは、どうもうまくいきそうでないので、黒板に描いているグループにいて、「T君、信号機の横のな—に？」ときいてみました。Tは、「あのね、これ歩道橋、ぼく渡ったに」といい、さらに、「歩道橋さ、ふわふわってするに、兄ちゃんが走ってたら、ぼくふわふわしてこわかったに」と、身振りをまじえ話してくれるTをみていて、M子ははじめて、にっこりとして聞いてくれたのです。

この歩道橋は、最近新設されたもので、あとからわかったのですが、M子も祖母と渡ったらしく、共感を覚えたのでしょう。

「ふーん、そんなにふわふわするの？ Mちゃんも渡った？」と教師はM子にきいてやると、「おばあちゃんと」とぼつり返事をしてくれたので、「そうMちゃんもこわかった？」ときくと、「うん」といっただけで、またもとの無表情にもどってしまいました。そのうち、Tは歩道橋につづけていくつかの道を描き始め、「ぼくのうちはここ」「わたしのうちは、ここ」と、H、K、A子、W子などまじって賑やかに描きだし黒板に絵がいつぱ

いになったため、園庭にいつて描こうと教師は提案してみました。

そのとき、M子は他の幼児にまじって、自分から靴箱にいつて下靴とかえだしていました。いつも促してばかりいたM子なのに、ここはチャンスと思ひ、教師も幼児たちといっしょにはずんでかけだしていったのですが、みんなはさっそく石ころを拾ったり、竹で大きく線をかいたり、家を描いて遊んでいるに、M子はやっぱりみています。「はい、Mちゃんにこれあげるわ」木片を与えてやったのですが、それを持っただけで描こうとしないのです。教師はじれったい気持になりましたが、この段階では、M子にとつて、教師の手をかりずに、仲間のなかに、ひとりではいれたことだけでも進歩だったのに、関心をもったからすぐ描いてほしいと思うのは、教師のあせりだと気がついたのです。

近道をするのでなく、この幼児のもつ成長にあわせて、じっくりその場の判断をしてやらねばと反省いたしました。このような考えのもとに、今後できる限り、M子の動作・表情・興味をみつけどし、思わすのりだしてくるような機会をつくってやりたいと考えます。そしてひとりの幼児を伸ばすための努力は、ひいては、全体の幼児の興味をも広げてやることになるのではないかと思ひます。今年の実践においても、このような問題は、また再現されるのではないかと思ひますが、ひとりひとりの幼児の、そ

の幼児なりの園生活への適応をじっくりみつめて、あせらずに、あたたかい気持ちで見守ってやるなかで、情緒の安定や、満足をきせてやりたいと思います。

## (2) 「こいつがわるい」

——友だちの存在の意識——

五月の幼児たちは、自己主張が盛んになり、口争いも多くなってきました。また反面、これまで元気に遊んでいた幼児が、ちょっとしたはずみで急に泣きだしたりして、幼児たちの行動にもいくつかの変化がみられてきます。「ぼくが先みつけた」といって離さなかったり、チャンバラの始まるのも五月です。そしてもの珍しさもあり、興味本位で遊んでいた四月にくらべて、自分から遊びが選択できるようになってきます。したがって遊びがおもしろくなり、自我もできてきますし、自分の意志もはっきりと友だちに伝えようとするため、けんかが始まります。

そのけんかは、動機など問題にしないで、たいた、押したといったその場の行動の結果を中心に善悪を判断します。「こいつが悪い」と気の強い幼児は、あくまで主張してゆずりませんし、消極的な幼児は、引っ込んでしまうわけですが、でもこの時期の幼児たちは、けんかをして初めてお互いに相手を知ります。自我をどのようにして調整し、なかよく遊ぶためのくふうはどのような

にしていくのか、教師もそのための援助をしてやるべきですが、あくまで教師が説得的にのりだしてけんか両成敗にしてしまうのは、よくないようです。つまり幼児たちには、やはりそれぞれの理由があるのですし、この時期に理解できる範囲のいきさつを両方に聞いてやる必要があります。といってもそれは、感情が中心であり、論理的な言語による仲裁の意味がないでしょう。つまり、幼児のあいだに互いにしこりの残らないよう、またけんかというものを、頭からいけないものと罪悪視しないで物事に対する判断力をつけてやるためのよい方向づけを、教師として導いてやるべきでしょう。そして自分の立場を弁解するのではなく、自分の考えや、意志もはっきりいえるような習慣をつけてやりたいと思います。

ベビーオルガンの前で、KとMが、顔を真赤にしている争いを始め、側でK子が泣いているのです。KとMもお互いに「こいつが先たいたんや」といって互いにゆずりません。そのうちTやHと四、五人仲間が集まってきて、人気のあるKに加勢したのです。負けん気のMは、ますます興奮してKに突っかかっていくように、このままでは、幼児たちにまかせておけないと思って側へ寄っていくと、「またM君、K子ちゃんを泣かしたんて」と側からN子も口出しします。MとKはよくいたずらするので、幼児たちも「また」といっていますし、教師自身も、簡単に

この場はなだめてやりたいと思っていたのですが、「ぼくってたかへんもん、K君がぼくをたたいたんや」と訴えるMの顔がしんけんなので教師も、「K君ぼくどうなの？」ときくと、「ほんでもK子ちゃんを泣かしたったんや」というのです。このけんかはK子が原因で、K子からもよくきくと、Mは、K子のスモックの袖を引っ張っただけで、それもテレビをみようといつて、「はよ、へやへこい」ときそいかけるつもり動作だったのでした。教師もこのMに対して、「また、やってるな」と思ったり、単なる衝突とみて、その場をすませようと思ったことを、強く反省させられたのです。

このことは、幼児たちのあいだに生まれる判断力が、リーダー的な存在に服従していけばよいものなのか、あるいは、「けんかは両方わるい」といったあきらめのようなものでなく、結果より動機を大切にすると考えた考え方に、少しずつでも向いているようになっていく過程を示しているのではないかと思うのです。そのためには、そのような発達に応じた教師の構え方が大切だと思えました。ささいな見過ごしてしまいそうな幼児の生活のなかに、実は大切なものがあるのだと思うのです。そしていたずらのM君にも親切なところもあるんだなあといったやさしさも感じるとするような、その場の教師の導き方も今後心掛けていきたいと思えます。

### (3) 「ぼくのかいたんこれ」

——自信と意欲——

六月になると、情緒不安定だった幼児も落ち着きをみせてくるとともに、ばらばらだった遊びにもややまとまりをみせ、友だち関係も広まってきました。その反面、友だちの好き嫌いがはっきりしてきたり、教師への告げ口も多くなったり、「○○ちゃんにはないしょ」とか、「○○くんは、あっちへいけ」といって、仲間からはみだされてしまう幼児もでてまいります。そのために、折角遊びが発展していても、友だち関係でこわれてしまったり、長つづきのしない場面が多くみられます。また、「こいつは弱いから」「この子は下手や」といって友だちに対する批判のようなものもできてきますので、こういったなかでそれぞれの幼児たちが、互いにみとめ合い、みんなでやれば楽しいのだという実感をもたせてやりたいと考えます。

ある日、えびがにをとってきたSの発言から発展し、川にいる小動物を描いて、みんなで共同画をやりたいと教師はもちかけました。ほとんどの幼児たちは、興味をもって、さっそくやりかけたのですが、M子は相変わらず、やろうとしなかったし、A、N、K子は、「先生、なんでもええの？」と心配そうに質問してきました。この幼児たちは、話し合いのときは、「めだか、どじ

よう、おたまじゃくし」などと元気に発言もしていたのに、さて絵画的に表現するとなると、自分のこれまで、気やすく描いていたものでないので、抵抗があったのでしよう。そして、教師の励ましで描いてはいたが、自分で「描きたい」という気持ではなく、なんとなく楽しさが感じられませんでした。

大いに矛盾を感じていましたが、その翌朝、登園後の幼児たちは、自分たちから（K子もまざる）おたまじゃくしを三つも描き、うしろの掲示板の曲折のある川の流れに貼りつけているのです。

そしてAは、教師の手を引つ張って、「これ、えびがにの赤ちゃん」と大きいえびがにの背中につたかわいいうえびがにを指さしてくれました。ほんとうにかわいく、「ほら、みんなみて、これえびがにの赤ちゃんですって」と幼児たちにAの描いたこと知らせてやる。他の幼児たちもここに認めてくれていました。しばらくしてK子も、「これも赤ちゃんやに」とおたまじゃくしの小さいのを教師にみせにきたのです。そのとき、M子もK子にももらったおたまじゃくしの一匹を手にもって教師の側へきたので、「まあ、ほんとうにかわいいわね、みんな泳がしてあげてね」といってやると、M子もうれしそうにとんでいきました。K子、Aのおたまじゃくしは、昨日と同じで表現そのものには発展はみられませんでした。また「めだかの学校の……」のうたをうたったり、「大きい

どじょうとえびがにがお話しとんの」と想像する幼児もでき、このあとのリズム遊びのときのM子も、友だちの模倣をしながらも、その動作には、幼児らしさを感じました。

このように、友だちといっしょにしごとをするなかで、幼児のもつ可能性を、幼児らの興味や関心の度合いをたしかめていきながら、少しずつでも深めてやるための援助や励ましは、教師として最も大切なことだと思えます。その過程のなかに育っていく幼児の自信は、次の段階へ進んでいく欠くことのできないものだと思います。ひとりの幼児の意欲やがんばりは、他の幼児への啓発にもなり、活動を楽しく発展させる支えになっていくものとして、今後の経験のなかでも、これらの考え方を土台として、幼児とともに進んでいきたいと考えます。

#### (4) 「A君ノはしごって」

——思考と協力のめばえ——

七月の幼児たちは、すっかり自信をもって振る舞えるようになり、中心になる幼児も目立ってきますし、「かけっこする子この指とーまれ」とか、「きょうパン持ってきた子手をあげて」などの誰かの発言に、連鎖的に楽しく反応したり、グループをくんでの遊びも多くなってきました。そしてみんなの活気が増すほど、遊びの範囲も広まり、材料をフルに活用してきます。これまでは、

幼児の遊びに、教師の提案や支えが必要でしたのに、この時期になれば、ほとんど自分たちでやっていこうとする気構えがうかがわれるようになり、幼児の創造性のめばえも、ぐんぐん育って行くのではないかと思われます。でも反面、突飛なことを平気でしてみたり、みんなできめたルールも大胆に違反したりしますので、楽しく遊んでいる姿に教師は安易になってはいけないと思うのです。リーダーや、幼児たちの発言を尊重して、みんなの幼児たちが、意味のある望ましい経験をしていくための努力が大切です。

この日は教師はフィンガーベインティングのあと、きょうは涼しいから戸外でうんと遊ぼうと幼児たちにもちかけました。「Aくんたち、はしごであそぼう」とMの提案に、男児のほとんどは園庭に走っていく。「女の子もいれてあげてね」と教師は声をかけてやります。「おーい、これA君つって、」とKは、重い階段をつらうとしているし、一方MとWは「こっへはしごをかけよか」「こっちにしよか」などと相談しながら、足台二個を並べてそこへはしごを渡しています。

いままでの遊びは、平面的な配列、つまり、主として、教師の提案から発展した、わたる、はう、くぐる、などの身体的活動をいれた鬼遊びの変形でしたが、きょうの遊びは、はしご、平均台、足台、階段など組み合わせて何かをつらうとしているので

す。はしごを横に渡してどうもひこうきの翼らしい。後から走ってきたWが、はしごのつかかると、「あかん、そこひこうきはねやぞ」とAは説明しています。女兒も集まってきて、小さいベンチを並べて腰をおろしてみています。

そのうち、もう一個のはしごをもってきたHに、「あほ、ジェット機なんやぞ、それはいらん」とA、「これはちがうぞ、お客さんののるとこやんか」とK、「そしたらこっへおこか」と、A、K、Hで前翼に、はしごの前方をかけ、低い足台を後方において、そこへうまくはしごがのるように距離を考えているので、「もうすこし台を前の方へおいた方が安全よ」と教師も努力してやっただけです。そのうち、女兒の坐っている椅子をかしてといてくるので、なにに使うのかとの女兒の質問に、お客さんの座席をつくるのだからと、女兒に椅子を借してもらう許可を求めています。「そんなら私たち乗せてくれる」とN子は条件をつけているので、「ほんとうね、たくさん乗れるように考えてよ」と教師も注文をつけてやっただけです。

そのとき、砂場にいたA子、N、S子たちが、「先生！キーキ食べてちょうだい」と大きな声で呼んでいたが、教師は、この飛行機づくりをもうすこしみとどけたいと思い、「ちよっとまってね」と返事をしているうちに、AとHは、さらに足台の上にもう一段足台をつみ、はしごをその上へのせ、翼を二段式にしよ

うとしています。「そっちをもって」といわなくても、自然と気が伝わるのか、二人でタイミングよくのせている。「ぼく運転手」といながらMは翼の中央に乗り得意満面、お客さんもふえ、そのうち、ケーキづくりの女児たちは待ちきれず運んでくる。「まあどうもごちそうさま」と教師は葉っぱをあしらってあるケーキを食べながら、お客さんになった幼児たちにもわけてあげる。運転手は、KとMが占領していたが、他の男児は、このリーダーを認めているのか、役割を横取りしようとしないうで、客席で、「次はアメリカ」「次はイギリス」とアナウンスしているのです。女児も椅子に坐って飛行機に乗ったつもり表情です。

このような移動遊具を使った遊びは、大筋肉運動にもなり、重量もあるので、どうしても二人以上の協力があるのです。そこをねらって作成してあるのですが、一人の幼児の発想につられて仲間に入った幼児たちも、またそこで興味をもち、自分の役割に応じてどのようにしたらより楽しくなるかということや、さらに遊びを發展させるための考えもわいてきます。いままで奪い合いや、先を争っていた幼児たちも、友だちの意見もきいてあげるという態度もみえてきました。限られた部屋のふんいきとちがいが、幼児たちの園庭や園外での表情は生き生きとしています。このあと、食堂車に發展し、コックさんでもき、遊びの内容が変化していききましたが、そのプロセスには、幼児らの思考と協力のめばえ

がよくうかがえたのです。これらの幼児らの發達を大切にし、教師はさらに望ましいものにするための配慮を当然考えていかなければと思います。

#### (四) 二学期への展望

このようにして、一学期は、人間的なふれ合いのなかで、幼児なりに楽しく多くの難関をのりこえてきたのではないかと思えます。でもときには、退行的な行動もみられました。がそれは別の面からみれば、これまでの家庭生活でのたりないことを補う治療的期間ともいえます。そのためには、素朴な遊びや活動を十分させ、認めてやるが必要であり、十分な意義があると思われまゝです。でも十分に自己を表出させたかという点については、やはりひとりひとりの幼児が成長や發達のプロセスを異にしていますので、一学期においてできるだけ治療することにより、今後の二期に期待することになります。

未分化から少しずつ分化していくその具体的な場面を、二学期の成長のなかで、望ましい方向へとさらに成長し發達させたいと考えます。つまり、とくに社会的行動の發達を中心として、それらにともなう、認識・身体的な面の發達をも含めて、幼児のパフォーマンス形成の中核となる豊かな感情を支える教育の場を提供してやるのが大切だと思います。

(四日市市立富田幼稚園)